

2013 年交流協会文化人招聘（訪日後の感想）

～日本文化に触れた一週間～

台湾・台南市政府文化局局长 葉澤山

2013 年初夏、交流協会の招へいにより日本を訪問させて頂いた。博物館、美術館、寺院、伝統芸能等々同協会の行き届いたアレンジにより、全ての訪問先において大変参考となる知識を得ることができた。

伝統とイノベーションの結合 日本の博物館の様々な特色

台南市は、美術館設立準備中にあり、今回の訪日において国立新美術館、江戸東京博物館、武蔵野音楽大学楽器博物館等の著名な博物館を訪問できたことは、台南市の文化発展のために意義のあることである。各博物館は其々に特色を生かし、日本文化の伝統を重視しつつも、時代の移り変わりとともに新しい概念を生み出している。

【東京国立新美術館】

同館によると、国立新美術館は 1995 年平山郁夫会長の調査研究及び計画を経て、1999 年基本設計計画が完成。2000 年に建築家・黒川紀章氏に委託し、2002 年 1 月に設計が完成。2006 年竣工、2007 年 1 月 21 日にグランドオープン。約 380 億円を投じ、日本最大、最新の美術館となった。

計画立案から設計までに 7 年を費やし、更に建築に 4 年かけている。日本では新しい美術館の設立にあたり、綿密に計画を立て、慎重に審査・評価を重ねた上で、優秀な建築家と協力し、最高品質を追求する。安易に速成に走らない姿勢は学ぶべきである。

国立新美術館は約 3 万 m²の用地に、47,960m²の床面積を有している。元は歩兵第三連隊の兵舎跡地で、全面撤去になるところを市民の要望により一部歴史的建造物を保存した。屋外の用地に余裕がなく、一般的な美術館のように広い緑地や屋外アートはないが、屋内の展示スペースは大変広々としており、1,000m²、高さ 5 m の展示室を 10 室、2,000m²、高さ 8 m の展示室 2 室を有し、様々な展示条件を満たすことが可能となっている。展示作業の効率化のため、地下に準備室や保管室を設置、直接搬入可能な場所までトラックが接近でき、大型作品専用エレベーターを複数完備することで作品を会場まで直接搬入可能にしている。



東京国立新美術館は、波打つガラスのカーテンのような外観をしており、美しいだけでなく、自然光を取り入れ、二酸化炭素排出量削減の機能も持っている。

同館は様々な展示をメインに、市民の憩いの場所として、地下1階から3階の各フロアに売店、レストラン、喫茶室、休憩コーナーを配置、2階には蔵書9万冊の美術図書館があり、研究者の利用が多い。また、300席の講演ホールはレクチャー用。職員のオフィスは狭いながらも非常に簡潔で便利な造りとなっている。所蔵作品を持たないことで、保管スペースを設ける必要がなく、その分展示室及び公共サービス空間に全て利用している。

同館の特徴

1. 展示室の天井が高く、広い。あらゆる展示に対応可能。パーティションも多様に変化可能で、展示内容に合わせて自由自在に調節可能。動線や安全性も細部まで考慮された設計となっている。



東京国立新美術館の内部はとて高天井が高く、参観者はいったん足を踏み入るとその雰囲気に圧倒される。天井の高さの設計に合わせて、全館に床設置式のエアコンが設置されている。

2. サービススペース（売店やレストランなど）の面積が三分の一を占め、全体として快適且つ親しみやすい空間を作り出しており、同館の「美術館が市民の癒しの場となる」理念が実現されている。



内部はグレードが高くゆったりとした休息空間にデザインされており、市民の休日の憩いの場となっている。

る。年間入場者数は200万人以上。ご案内頂いた水野庶務課長によると、既に市民の憩いの場として馴染んでおり、同館の当初の目標は達成できたとのこと。

3. 全館に床からの空調システムを採用することで、吹き抜けになっている大空間までも省エネ電力で快適な温度に設定可能。



床に埋め込まれた冷房装置。この素晴らしい設計のおかげで全館とても快適である。

経営については、年間約16億円の必要経費の内訳は、政府の補助金10億円、同館の収益6億円であるが、年々政府の補助金減額の趨勢にある。

同館の収益は、海外美術展の入場料で得ており、入場料は600~2000円程度。また、展示室の貸し出しもあり、1,000㎡の展示室を2週間貸し出すと100万円の収入となる。展示室の貸し出しは審査を通過した団体のみを対象とし、個人は対象外。個展については、全て同館の開催によることとしている。売店、レストランなどは全て民間に委託し、賃貸料を徴収している。人員配置については、正規雇用は僅か14名、その他約30名を雇っており、経営は楽ではない様子。

台南市が現在準備中の美術館は、用地面積に限りがあため、うまく空間を利用し、経営管理する必要があり、国立新美術館のノウハウは大変参考となる。

【京都国際マンガミュージアム】

マンガは日本の文化において重要な位置を占めている。同ミュージアムは平安時代の絵巻から現代のアニメまで系統的に漏れなく収蔵している。元は龍池小学校であり、同ミュージアムは廃校を再利用した好例である。現在台湾も少子化による学校の合併が進んでおり、市民の思い出が詰まった廃校を撤去後、より良いものに生まれ変わらせる必要があり、考えさせられる。

同ミュージアムの特徴、参観後の感想

1. 廃校になった小学校を再利用した成功例。京都市立龍池小学校は周辺に3つの小学校があり、生徒減少に伴い廃校となったが、市の教育委員会と精華大学が協力し同ミュージアムを設立。
2. 精華大学は2000年にマンガ学部を設置。2003年より博物館用にマンガ等関係資料を取

集、2006年11月に開館。収蔵している30万冊のマンガのうち5万冊が閲覧用、その他25万冊は研究用として、登録者（現在1,700名）のみ利用可能としている。年間24~30万人が入場しており、地域の活性化に貢献している。

3. 市民からもマンガの寄付が多く、世界各国のマンガがある。平日の入場者は外国人観光客が多く、シルバー世代も昔を懐かしんで来館する。観光と文化保存を兼ね備えたミュージアムである。
4. 龍池小学校は明治2年に創立。日本で最初の（学区制）小学校で、市の文化遺産に指定されて



日本で最も早くできた小学校・龍池小学校跡



現在、京都国際漫画ミュージアムに利用されており、観光と文化保存の役割を果たしている。

いる。卒業生のために、校長室を龍池歴史記念室として保存しており、地域住民用の地域集會室も設置し、地域住民に親しまれている。

5. 展示スペースを設け、不定期に、若手漫画家の作品、著名な漫画家の原稿等を展示しており、マンガ鑑賞以外にも、見どころがある。
6. 展示方法は、作家の氏名、年代、少年マンガ、少女マンガ等に分類され、有名作品のキャラクターの描き下ろしと、有名漫画家の手の模型(筆を持っている様子)はよい記念になるのでファンの心を惹きつけている。
7. こども図書館は、かわいいデザインで多くの子どもが利用している。

歴史的建築街の活性化、古跡の修復、古き良き時代の魅力

多くの博物館以外にも、川越市伝統建築保存地区、三菱倉庫跡(神戸モザイク内)も訪問。

【川越市歴史保存地区】

埼玉県川越市は江戸時代に商業で栄えた都市で、「小江戸」と称された。戦国時代の数々の戦いや関東大震災でも被害を受けておらず、江戸、明治、大正、昭和初期まで各時代の歴史的建築と街道が完全に残っている。

最も印象に残っているのは、一番街である。醸し出される古い時代の空気を感じることができ、歩いていると時空を越えた気がしてくる。

日本の歴史的建築地区の保存と再利用はとても参考になる。伝統的な風貌を残すために、改築及び新築を制限する都市計画を実施する一方、修復については補助金を拠出し、建築の外観を保存し



川越市の伝統建築物。古都の香りが多くの観光客を惹き付ける。

つつ、内装は比較的自由にする方法により、様々な再利用を可能にしている。レストラン、ショップが立ち並び、歴史的要素を文化遺産へとうまく転向している。

台南は台湾の古都で、古い建築が多く残っている。近年、市政府と民間が協力し、古い建築を修復し再利用する計画を推進中。昔の雰囲気の魅力として引き出し、若者層を惹きつける狙いである。歴史的建築を一つ一つ修復していくことで、「点」から「線」、そして「面」へと広げていき、歴史的建築地区の価値を高めたい。文化資産の保存と同時に経済効果も期待している。

【海を越える美談、小林義一氏からの文物寄贈】

小林義一氏との面会は、市長の名代として同氏に感謝状を贈呈するという今回の訪日最大の任務であった。

小林義一氏の父・小林平一氏は、1908年「小林伝統製瓦」を創業、各国の民俗文物及び動物の生態の研究に熱心で、若いころに世界各国を周遊し、各国の文物を収集、収蔵数は無数に上る。小林義一氏の話では、父・平一氏は世界各地で現地の人



台南市長に代わり、小林さん家族が台南市に送ってくださった文物への感謝状を贈った。(左が葉局長)

が文物の価値を知らず大切にしないことを見過ごすことができず、収集を始めた。父はよく、私の収集は「しばらくの間代理で保管するだけ」で、収集品は将来その国に返還しなければならないと言っていた。2002年に父・平一氏が他界した後、平一氏の妻・小林幾代氏は同家に伝わる台湾の文物を台湾にお返ししたいと願っていた。とりわけ日本で3.11大震災が発生した際の台湾から日本に対する様々な協力や援助を見て、更に返還したいとの希望が募ってきた。また、体の不調もあり、自分が生きているうちに主人の遺志を叶えたいとの思いが強くなった。小林義一氏は、「顔水龍」画伯の故郷が台南で、その台南市がちょうど美術館を建造中と知り、友人を介して台南市美術館への

寄贈を決めた。

寄贈品は、台湾で有名な画家・顔水龍のモザイク作品を始め、台湾原住民の文物、南島原住民の文物等計157点に上る。最も注目されるのは、顔水龍画伯が友情の証として小林平一氏に贈ったモザイク作品である。小林平一氏が1970年代に5年間かけて台湾の鳥類と蝶の標本を収集していた時、顔水龍画伯が協力していたことで厚い友情が結ばれたとのこと。

この度の訪問時に、寄贈依頼書の署名及び市長を代表して感謝状を贈呈できたことは海を越える美談となった。

交流協会には、招聘のお話を頂いた当初から密に連絡を頂き、細やかなアレンジをして頂いた。特に、台南市民からの謝意伝達及び頼清徳・台南市長からの感謝状の小林家への贈呈を日程に入れて頂き、心から感謝申し上げる。この他にも紹介できなかったが、江戸東京博物館、武蔵野音楽大学楽器博物館、雅楽器博物館、姫路城、芸術文化振興会、高台寺、銀閣寺、宝塚歌劇団等も訪問している。また、東京本部におかれては、行く先々で特色ある食事もアレンジして頂き、庶民の日常食を含め、日本の食文化も学ぶことができた。今回の訪日では日本文化について、あらゆる分野の勉強をさせて頂き、大きな収穫となった。